学苑　第八二六号　二〜八（二〇〇九・八）

『逢坂越えぬ権中納言』と『花桜折る少将』とにおける男主人公の〈恋〉の行方をめぐって

――冒頭における結末の暗示もしくは予告の提示――

大倉　比呂志

一

『逢坂越えぬ権中納言』の冒頭は、

①㋑五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人恋しう、秋の夕べにも劣らぬ風に、うち匂ひたるは、をかしうもあはれにも思ひ知らるるを、山ほととぎすも里なれて語らふに、三日月のかげほのかなるは、折から忍びがたくて、㋺例の宮わたりにおとなはまほしう思さるれど、かひあらじとうちなげかれて、㋩あるわたりの、なほ情けあまりなるまでと思せど、そなたはもの憂きなるべし。（四三一）[1]

と語られており、㋑は有名な「さつきまつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」[2]（古今和歌集・夏・一三九・よみ人しらず）がふまえられているわけだが、橘には〈トゲ〉があるという点を看過すべきではなかろう。すなわち、〈トゲ〉には物事が順調に進行ないしは展開していかない障壁、いわば〈障害〉という負的な意味が内包されているのであって、男主人公権中納言（以下、権中納言と称する）にとって近い将来何らかの〈障害〉に遭遇する可能性が暗示されているのではなかろうか。それが冒頭部で語られている点が重要なのだ。もちろん、㋑には花橘の香が権中納言に昔馴染の女を想起させる機能を帯びているわけだが、㋩のごとく権中納言に媚態を尽くす女よりも、㋺のように権中納言が来訪しても冷淡にしか対応しようとしない姫宮に執着している状況が語られているのである。その後、根合が行なわれることになり、小宰相の君から左右どちらに味方するのかと尋ねられて、権中納言は「『あやめも知らぬ身なれども、引き取りたまはむ方にこそ』」（四三二）と答えて、左方の方人となるのに対して、右方の方人となった三位中将は「『ことにも侍らぬ。心の思はむ限りこそは』と、たのもしうのたまふ」（四三三）とある点から、消極的な権中納言と積極的な三位中将とが対照的に語られている。ところが根合の当日、権中納言は夜明けから準備にいそしむのであり、その結果、左方が勝利を収めるのである。

その根合終了後に、管弦の遊びが開催されるわけだが、

②中納言、堪へずをかしうや思さるらむ、和琴取り寄せて、弾き合せたまへり。この世のこととも聞こえず。三位、横笛、四位少将、拍子とりて、㋺蔵人少将、伊勢の海うたひたまふ、声まぎれずうつくし。……㋭中納言まかりでたまふとて、「階のもとの薔薇も」と、うち誦じたまへるを、若き人々は、あかず慕ひぬべく、めできこゆ。㋩かの宮わたりにも、おぼつかなきほどになりにけるをと、おとなはまほしう思せど、いたう更けぬらむとて、うち臥したまへれど、まどろまれず。「人は物をや」とぞ言はれたまひける。……例のかひなさを思しなげくほどに、はかなく五月も過ぎぬ。（四三七―四三九）

と語られている。㋺により蔵人少将が催馬楽「伊勢の海」を歌うわけだが、それは、

③伊勢の海の　きよき渚に　潮間に　なのりそや摘まむ　貝や拾はむや　玉や拾はむや（伊勢の海の汚れなく美しい海岸で、潮の引いている間に、なのりそを摘もう。貝を拾おうよ。玉を拾おうよ。）[3]

であり、「祝宴賀宴の場にふさわしい祝言の歌謡として享受されていた」[4]と考えられはするものの、波線部「貝や拾はむや」は単に貝を意味するのではなく、『土左日記』にも「何の葦蔭にことづけて、老海鼠（ほや）のつまの胎鮑（いずし）、鮑鮑（あはび）をぞ、心にもあらぬ脛にあげて見せける」[5]（一月十三日条）とあるように、貝の仲間である「胎貝」と「鮑」は〈女陰〉を意味しているのであって、「伊勢の海」における「貝」にも深層的には〈女〉の意味が内在化されているのではなかろうか。[6]だからこそ、公的な〈根合〉で勝利を収めた権中納言は欲情がそそられた結果、㋩のごとく、〈根合〉と同音である姫宮との〈寝合〉を希求したのであったが、深夜になってしまったということで姫宮訪問を諦めたのである。そこに権中納言の消極性が浮き彫りにされているわけだが、㋭における権中納言の朗詠は何を意味しているのだろうか。それは、

④甕頭　竹葉は春を経て熟す　階底の薔薇は夏に入つて開く（甕頭とか竹葉などといわれる酒が、今年も熟成の春を過ぎていっそうおいしくなった。階段の辺りの薔薇の花は夏を迎えてりっぱに咲いている。）[7]（『和漢朗詠集』首夏・白居易）

の波線部を権中納言は朗詠したわけだが、「薔薇」は花であって、そこに〈女〉の意味が内包されており、その「薔薇」が夏になって美しく咲いているのであるから、姫宮も〈女〉として充分に開花しているのだろうと権中納言は考えたのではなかろうか。だが、「橘」と同様「薔薇」にも〈トゲ〉があり、それは〈障害〉の意味を内在化させているのであって、そのために権中納言は姫宮を訪問したいと希望するものの、消極的にならざるをえなかったのではないのか。つまり、権中納言にとって〈障害〉が二個所も語られている点に注意せねばなるまい。とすれば、そこに権中納言と姫君との将来における〈障害の可能性〉が予告されていたのではないかと考えられるわけだが、六月になって権中納言は姫宮を訪問し、姫宮付きの侍女である宰相の君と対面した後、

⑤「例の、かひなくとも、かくと聞きつばかりの（姫宮ノ）御ことのはをだに」と（権中納言ガ宰相の君ヲ）せめたまへば、「いさや」とうちなげきて入るに、（権中納言ハ）やをらつづきて入りぬ。（四三九）

と語られているように、権中納言は姫宮の部屋への闖入は成功したものの、

結果的には姫宮との私的な〈寝合〉に失敗したという点から、[8]冒頭における「橘」とこの「薔薇」がともに〈トゲ〉を持っていることが重要なのであって、それらが〈障害〉を意味する隠喩である点に注目すると、「薔薇」の内在化された意味とともに、冒頭において結末が暗示もしくは予告されていたことは看過すべきではなかろう。とすれば、この『逢坂越えぬ権中納言』は以下述べるごとく、『花桜折る少将』と同様な構成のうえに成り立っていると考えられる。

二

その『花桜折る少将』の冒頭は「月にはかられて」（三八七）とあるように、主人公中将（以下、中将と称する）が月明かりによって夜明けになったと誤認している点から、月にだまされたことが語られており、それが結末の〈女〉の取り違えに脈絡している。[9]そこで中将の女性関係を考えてみると、まだ真夜中であったのにもかかわらず、月光によって夜明けになったと錯覚して女の家を飛び出し、途中でそれに気付いたものの、女の家に戻ろうとはしない中将はそれほどその女（現在の女）に魅力を感じておらず、またその途中で過去の女を思い出して安否を尋ねた結果、中将は「あはれのことや。尼などにやなりたるらむと、うしろめたく」（三八八）思っているという点からも、現時点においては過去のできごとであり、中将にとって現在と過去の女とはいわば不毛なる恋であって、そこで垣間見た姫君（未来の女）も結末で姫君と祖母とを取り違えたということに表象されているごとく、未来の女に対しても不毛なる恋になることが冒頭で暗示ないしは予告されているのであって、[10]主人公の〈恋〉の行方は冒頭において既に結末が暗示もしくは予告されているという点からも、『逢坂越えぬ権中納言』と『花桜折る少将』の二作品は同趣向の作品であったと考えられよう。

さらに、この二作品は結末において男主人公の〈恋〉の行方が照射されていると同時に、冒頭の直後で『逢坂越えぬ権中納言』は、

⑥いかにせむと、（権中納言ハ）ながめたまふほどに、「内裏に、御遊び始まるを、ただ今、参らせたまへ」とて、蔵人少将参りたまへり。「（帝ガ）待たせたまふを」など、そそのかしきこゆれば、もの憂ながら、「車さし寄せよ」など、のたまふを、……（四三一）

と語られているように、帝が管弦の遊びを開くに当たって、権中納言の参加を希望しているために使者を遣わしたのである。とすれば、権中納言は管弦の遊びにおいて欠くことのできない人物であったことが理解されよう。一方、『花桜折る少将』の中将も姫君を垣間見て、自邸に帰宅し、「日さしあがるほどに起きたま」（三九〇）うた後、現在進行中の女から贈られてきた後朝の返歌を見ていた折、友人の源中将と兵衛佐が来訪し、

⑦「昨夜は、いづくに隠れたまへりしぞ。内裏に御遊びありて召ししかども、見つけたてまつらでこそ」とのたまへば、「ここにこそ侍りしか。あやしかりけることかな」など（中将ハ）のたまふ。（三九〇）

とあるごとく、昨夜宮中で管弦の遊びがあって、帝が中将を捜していたことが語られており、また「琵琶を黄鐘調にしらべて、いとのどやかに、をかしく弾きたまふ（中将ノ）御手つきなど、限りなき女も、かくはえあらじと見ゆ。このかたの人々召し出でて、さまざまうち合せつつ遊びたまふ」

（三九一―三九二）とあることによっても、中将も権中納言と同様、管弦に堪能であったことが理解できよう。以上のように、音楽に堪能である二人の男主人公が、巻末において意中の女に対して思い通りの結果を招来できなかったことが語られているのであり、その点からも両作品における同趣向の展開が指摘できるものと考えられる。

三

以上の点から、両作品の成立の前後関係を考えると、『逢坂越えぬ権中納言』は天喜三年（一〇五五）五月三日庚申の夜に開催された「六条斎院禖子内親王物語歌合」に小式部作として提出されたことが判明しているのに対して、『花桜折る少将』は文永八年（一二七一）に成立したとされる『風葉和歌集』（巻二・春下・一〇三）に、

⑧　花の散るころ、人のまうできたりけるに　　花桜折る中将

散る花を惜しみおきても君なくはたれにか見せむ宿の桜を[11]

の歌が所収されている。とすれば、『逢坂越えぬ権中納言』が『花桜折る少将』に影響を与えた可能性が一応考えられるが、現在のところ、あくまでも臆測の域にとどまらざるをえない。だが、二人の男主人公の意中の女に対する〈恋〉の行方をめぐって負的に語られているという共通性は否定しがたいのではなかろうか。それも冒頭において、男主人公にとっては不毛なる恋が暗示もしくは予告されているという点で、類似性を持っているという状況を看過すべきではなかろう。

四

ところで、『堤中納言物語』のような短編物語の特性を考える際には、「例の」ということばに注意を払う必要があろう。というのは、後述するごとく『源氏物語』で用いられている「例の」とは明らかに差異性を帯びているからだ。ちなみに『源氏物語』において、「例の」は『源氏物語大成』の索引篇によれば、三七〇余例ほど（「例の人様」「例の人めく」各二例も含む）が指摘できるが、その中で最初の巻近くから「例の」ということばの用例を任意に取り上げてみると、例えば帚木巻における、

⑨（光源氏ハ）例の、内裏に日数経たまふころ、（紀伊守邸デ空蟬ニ逢ウタメニ）さるべき方の忌待ち出でたまふ。（1・一〇九）[12]

の「例の」を含めた傍線部は、同巻の前にある、

⑩まだ（光源氏ガ）中将などにものしたまひし時は、内裏にのみさぶらひようしたまひて、大殿（＝左大臣邸）には絶え絶えまかでたまふ。（1・五三）

の傍線部を受けており、また若紫巻における、

⑪いとすごげに荒れたる所の、人少ななるに、いかに幼き人（＝紫上）おそろしからむと見ゆ。例の所に（光源氏ヲ）入れたてまつりて、少納言、（尼君ノ臨終ノ）御ありさまなどうち泣きつつ聞こえつづくるに、（光源氏ハ）あいなう御袖もただならず。（1・二四〇―二四一）

の傍線部は、やはり同巻の少し前にある、

⑫（光源氏ヲ）帰したてまつらむはかしこしとて、南の廂ひきつくろひて入れたてまつる。（1・二三六）

の傍線部を受けていると考えられる。

さらに、『源氏物語』の諸巻の中で多数の「例の」が用いられている総角巻（三〇例）と宿木巻（二七例）とを取り上げてみることにする。前者における「例の」は、

⑬（宇治姫君タチガ）けざやかにおとなびても（八宮ノ一周忌ノ法事ヲ）いかでかはさかしがりたまはむことわりにて、例の、古人（＝弁）召し出でてぞ（薫ハ）語らひたまふ。（5・二二七）

とあり、傍線部は二巻前の橋姫巻にある、

⑭さて、暁方の宮（＝八宮）の御行ひしたまふほどに、（薫ハ）かの老人召し出でてぞあひたまへり。（5・一五九）

の傍線部を受けており、後者における、

⑮（中君ガ）こよなく奥まりたまへるもいとつらくて、簾の下より几帳をすこし押し入れて、例の馴れ馴れしげに（薫ガ）近づき寄りたまふがいと苦しければ、わりなしと思して、……（5・四四五）

の傍線部は、同巻の前で語られている、

⑯（薫ハ）えつつみあへで、寄りゐたまへる柱のもとの簾の下より、やをらおよびて（中君ノ）御袖をとらへつ。女（＝中君）、さりや、あな心憂と思ふに、……（5・四二七）

の傍線部を受けていると考えられる。

このように『源氏物語』のような長編物語においては、「例の」ということばを受ける部分がそれ以前で語られている場合が多いという傾向を生じており、これが長編物語のひとつの特性ではないかと推測される。

それに対して、『堤中納言物語』に所収されている一〇編の中で「例の」ということばが多用されているのが、『逢坂越えぬ権中納言』と『思はぬ方に泊りする少将』であるが、『逢坂越えぬ権中納言』における「例の」は、

⑰三日月のかげほのかなるは、折から忍びがたくて、例の宮（＝姫宮）わたりに（権中納言ハ）おとなはまほしう思さるれど、かひあらじとうちなげかれて、……（四三一）

⑱（権中納言ハ）にくからずうち笑ひて、出でたまひぬるを、例の、つれなき御気色こそわびしけれ、かかる折は、うち乱れたまへかしとぞ（女房タチハ）見ゆる。（四三三）

⑲例の（姫宮ヘノ）かひなさを（権中納言ガ）思しなげくほどに、はかなく五月も過ぎぬ。（四三八―四三九）

⑳「例の、かひなくとも、かくと聞きつばかりの御ことのはをだに」と（権中納言ハ姫宮付キノ女房デアル宰相の君ヲ）せめたまへば、「いさや」とうちなげきて入るに、やをら（権中納言ハ）つづきて入りぬ。（四三九）

㉑「例の、わりなきことこそ。えも言ひ知らぬ（権中納言ノ）御気色、常よりもいとほしうこそ見たてまつりはべれ。『ただひとこと（姫宮ニ）聞こえ知らせまほしくてなむ。野にも山にも』と、（権中納言ガ）かこたせたまふこそ。わりなく侍る」と（宰相の君ガ姫宮ニ）聞こゆれば、……（四三九―四四〇）

㉒「いかが」と（宰相の君ガ姫宮ニ）聞こゆれば、「例は、宮（＝姫宮）に（アナタガ）教ふる」[13]とて、動きたまふべうもあらねば、……（四四〇）

の六例である。だが、「例の」が意味する部分がそれ以前の個所では語られてはおらず、『思はぬ方に泊りする少将』においては「例の」は六例用いられている。それらは、

㉓（少将ハ）もとより御志ありけることにて、姫君（＝姉君）をかき抱きて、御帳のうちへ入りたまひにけり。（姉君ノ）思しあきれたるさま、例のことなれば書かず。（四五八）

㉔権少将は、（おばデアル）大将殿の上の御風の気おはするにことつけて、例の（大将邸ニ）泊りたまへるに、……（四六三）

㉕例の、人のままなる（姉君ノ）御心にて、薄色のなよよかなるが、いとしみ深う、なつかしきほどなるを、いとど心苦しげにしませて、乗りたまひぬ。（四六四）

㉖（権少将ト姉君トハ）へだてなくさへなりぬるを、女は死ぬばかりぞ心憂く思したる。かかることは、例の、あはれも浅からぬにや、たぐひなくぞ思さる。（四六五）

㉗例の、清季参りて、「御車を」と言ふを、申し伝ふる人も、一所（＝姉君）は（少将ノモトヘ）おはしぬれば、疑ひなく思ひて、かくと（姉君ニ）申すに、これも、いとにはかにとは思せど、いま少し若くおはするにや、何とも思ひいたりもなくて、人々御衣など着せかへたてまつれば、われにもあらで、おはしぬ。（四六六）

㉘（姉君ト妹君トガ）帰りたまふ暁に、（後朝ノ）御歌どもあれど、例の、もらしにけり。（四六七）

であるが、㉓と㉗とはいわゆる省筆の草子地であり、㉖は推測のそれであると考えられる。残りの三例の「例の」も『逢坂越えぬ権中納言』と同様、それ以前の部分で「例の」を受ける個所が直接語られてはいないのだ。とすれば、「例の」ということばを受ける部分がそれ以前の個所で語られていないのが短編物語の特性なのではなかろうか。「例の」ということばは長編物語において「物語自身の中から類同的状況を選び出し」て、それを読者に想起させる装置[14]ではあるものの、「作者の一方的な独断ではなく、読者も暗黙のうちに了解する事項[15]」であり、それは一種の物語内引用として理解すべきであろうが、短編物語の場合には語られる分量が制限され、凝縮されているために、具体的に語られている内容に対して読者の想像力が要請されるのであって、いわば「省力化[16]」することによって、読者の想像力を最大限に喚起させようとする新形式による方法だったのだ。

例えば『逢坂越えぬ権中納言』は前述したように、「六条斎院禖子内親王物語歌合」に提出されたものであり、物語合という性格上、分量の制約が一因であったとも考えられようが、何の前置きもなしに多くの「例の」ということばが用いられることによって、読者の想像力を最大限に喚起させようとする語り手側による新企画が、上述の「例の」の多出現象をもたらしたのではなかったのだろうか。

と同時に、前述した『逢坂越えぬ権中納言』と『花桜折る少将』の二作品のように、冒頭において結末の暗示もしくは予告が語られているという点も、短編物語であるがゆえの特性と考えられるのではなかろうか。短編という分量が制約された枠組みの中で破綻することなく整然とした形態で結末を提示していくためには、前述したように、冒頭における結末の暗示もしくは予告という方法が有効であったのではなかろうか。

このように、今後『堤中納言物語』に所収されている各物語間の類似性が照射されることによって、『堤中納言物語』の諸作品の相互的特性が解明され、それが短編物語の特性並びに〈語り〉の方法を考える際の一助となるのではないかと考えている。

注（1）『逢坂越えぬ権中納言』『花桜折る少将』『思はぬ方に泊りする少将』の本文は新編日本古典文学全集により、漢数字は当該ページ数を示す。なお、表記を私に一部改めた個所がある。

（2）『古今和歌集』の本文は新日本古典文学大系による。

（3）催馬楽「伊勢の海」の本文と現代語訳は新編日本古典文学全集による。

（4）永池健二「磯遊びの歌謡（上）―催馬楽「伊勢海」歌の背景―」（「歌謡研究と資料」第三号　一九九〇・10）

（5）『土左日記』の本文は新編日本古典文学全集による。

（6）橘守部はこの部分を「思ふ女を障りなき間に、はやく手に入むといふたとへ」と読解し、「上の莫名告（ナノリソ）は、人にはそれと告（ノラ）ずして忍びてものせんよしにそへたるなるべし」とし、「弓削皇子、紀皇女を思ふ御歌四首」の中の一首「夕さらば潮満ち来なむ住吉の浅香の浦に玉藻刈りてな」（『万葉集』巻二・一二一）をあげて、「これも事なきうちにわが手に入んと云ことを告げしらせ給へるうた」と指摘している（「催馬楽譜入文」『橘守部全集』第七所収　国書刊行会　一九二一・1）。

（7）『和漢朗詠集』の本文と現代語訳は新編日本古典文学全集による。

（8）このことは既に大倉「「逢坂越えぬ権中納言」の構成―意味転換による相関性―」（「解釈」一九八九・10）で触れたことがある。

（9）岡一男『古典と作家』（文林堂双魚房　一九四三・7）、阿部好臣「短編物語の時間・序説―『このついで』をめぐって―」（「国文学研究資料館紀要」第五号　一九七九・3）

（10）大倉「「花桜折る少将」の手法―暗示の重層化―」（「解釈」一九九一・3）

（11）『風葉和歌集』の本文は岩波文庫『王朝物語秀歌選』による。

（12）『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集により、算用数字は当該の巻が所収されている分冊の番号、漢数字はその当該ページ数を示す。

（13）宰相の君が姫君に教える内容を明確にはしがたいが、注（1）前掲書の頭注では、「男に軽々しく返事をするなと教える意とも、いつもは返事の仕方をあなたが私に教えてくれるではないかの意ともとれる。宰相の君は姫宮の日常に責任をもつ乳母のような立場の女房らしい」と指摘している。

（14）三田村雅子「〈方法〉語りとテクスト　〈実例〉源氏物語で」（「国文学」一九九一・9）

（15）神尾暢子「慣例方式の表現効果」（『王朝文学の表現形成』新典社　一九九五・6。初出、「表現研究」第五十四号　一九九二・3）

（16）三田村雅子「短編物語の構造―堤中納言物語の〈例〉―」（「解釈と鑑賞」一九九一・10）

（おおくら　ひろし　日本語日本文学科）